◉賢問愚問◉解説コーナー

質問

足利学校の教学機能について　近世の足利学校の教学機能について、解説して下さい。

[回答者] 市橋 一郎

はじめに

平成二十七年（二〇一五）四月に近世教育遺産群として足利学校がほかの三か所とともに日本遺産に認定された。足利学校は、かつて本誌二二三号にて紹介したとおり、中世に活躍した教育機関であるが、近世においては寺院として扱われ、特に教学機能に関しては、消滅状態であるというのが今までの評価であった。足利学校の近世教育遺産としての評価は、古代・中世の儒学の学灯を近世に伝えた教育機関という点にあるとされている。それはそれとして評価されるべき事象であるが、近世の教学機能についても、明確にしていく必要がある。

近世中後期の足利学校には、足利学校庠主（幕府から任命される学校責任者）が記録した『足利学校記録』（以下単に『記録』と略す）という全九十二冊の史料がある。倉澤昭壽氏は、『記録』全冊を十五年以上かけて翻刻した（倉澤二〇〇三）。

本論では、『記録』のなかに残る教学機能と思われるものを抽出して、考察する。なお和暦年月日条を表記した部分は、全て『記録』からの引用である。

一　寺社奉行からの「足利学校」に関するお尋ね

天明七年（一七八七）十月頃に寺社奉行の松平和泉守から金地院（足利学校の触頭）へ足利学校に関するお尋ねが出されている。彼としては、足利郷の学校は、臨済宗の寺院なのに、単に学校と呼ばれ山号・寺名がないことを、疑問に思ったのであろうか。金地院では、当たり障りのないように答えており、寺社奉行が果たして納得したかどうかは定かではない。直後の天明七年十一月二十五日条の「奉願上覚」は、建物修復だけでなく、学徒扶持の願いも出しているので、寺社奉行としては、事前に学問所としての状況・機能を把握しておきたかったのであろうか。

そのお尋ねや「奉願上覚」から当時の足利学校の状況や目指すところがみえてくる。多少なりとも講義が行われていたことや、古来の学校では学徒らを広く受け入れていたことが世間に知られており、そのため今でも多くの希望者がいるが、とても養っていけないので断っていることなどが、読み取れる。即ち、

当時の状況としては学校という施設名称であるが、学問所として希望する学徒全てを常に受け入れて、定期的に講義が行われるような状態ではなかったことが、ある程度理解できる。

二　足利学校の講義

（一）『記録』にでてくる講義と書籍

既に先学も述べているが、[1]講義に使用した書籍は『詩経』『古文評林』『孝経』『大学』『三体詩』『論語』『古文』『古文後集』『七才集』『荘子』『唐詩選』『文章規範』『曹洞宗古文発起故』があり、『詩経』『孝経』『大学』『論語』（以上儒学経典）、『荘子』（道教経典）のほかは、漢詩や漢文章作成の教科書である。特に『古文』（真宝）や『三体詩』は禅僧に愛読された。近世初期の十世庠主寒松の学問の内容を書籍から調べた倉澤氏によれば、寒松の学問として仏書・儒書・国書・兵学・医学・漢詩文をあげており、足利学校の近世中後期の講義書籍に比べて、種類・量ともに凌駕し幅広い学問をしていたことが窺え（倉澤二〇一一）、近世初期までは、中世後期の足利学校の学風を受け継いでいることがわかる。

（二）講義形態

通常、一対多数の講義形態で、明和四年（一七六七）二月五日条では三三名、明和五年（一七六八）二月三日条では一九名であり、概ねこの位の人数であろう。講義場所は記載がないので不明であるが、方丈と思われる。江戸時代後期に孔子堂（大成殿）を学問所と呼称しており（寛政十三年〈一八〇一〉二月二十九日条）、孔子堂も教場となっていた可能性が大きい。また、少人数のときは書院などが使用されていたであろう。足利学校の講義は「計画的なものではなかった」と指摘されており、そのとおりであるが、同様に林家学問所でも当初は不定期であった（海原一九七九）。

詩句会は、足利学校でも行われており、これは、講義の一形態とみなすことができる。昌平坂学問所も同様であり、その稽古所には諸会業として会読・輪講・詩会などがあり、そのなかの詩会は詩文科の課業（割当てた学科）で、課業日数は毎月一回である（海原一九七九）。

ほかに一例であるが、足利学校で初心者の学習形態である素読の例が文化七年（一八一〇）四月二十三日条に「上州板鼻在斧三郎入門詩経素読初」とある。

江戸時代の代表的な学問所である昌平坂学問所との諸会業の違いは種類と回数の多さで、これはその施設の経済的理由によることが大きいと思われる。勿論それだけの理由ではないであろうが、学徒扶持を得られない足利学校としては、定期的に講義を開設することは困難であった。

（三）学習者

①寄宿生（住み込みで学ぶもの）

『記録』に残る人別調査には、境内の僧侶は四～五名、俗人は三～四名が居住とある。僧侶は、庠主のほか、三～四名の庠主の弟子（役僧等と記載。なかには直弟子でないが、修行・学問のために居住している者もいたと思われる）と、常時ではないが隠居の僧侶[2]がいた。俗人は三～四名が常住していたが、二～三名は小者で庫裡に付属した小者部屋[3]に居住しており、残りの〇～二名が俗人の寄宿生とでもいえる人々で、学寮に住んでいたのであろう。即ち住み込みの学習者（寄宿生）が常時ではないが、僧俗ともに存在したと思われる。

寛政十二年（一八〇〇）三月条に「御門村学童木邑連寿」とあり、学童が境内あるいは役人屋敷に住み込みで、勉学していたものと思われる。

②通学生

講義に出席している者の身分・職業としては、明和四年二月五日、明和五年二月三日条に、僧侶・足利藩士（陣内の衆）・医師・町民などの記載がみえる。一回限りの人もいるであろうが、そうした人々は通学生といえるのではないか。

③学習者の呼称

『記録』にでてくる呼称としては、筆弟（寛政十一年〈一七九九〉九月十三日条「詩会筆弟共」）をはじめとして、門弟子・弟子・烏帽子子・門人・学校書生などがあるが、彼らは詩句会に出席したり、庠主の葬儀に参列したり、初午の行事に参加している。

三　学徒扶持について

幕府が学徒扶持を認めないことは、既に倉澤氏が述べている（倉澤二〇一一）。具体的には、安永七年（一七七八）三月二日条「奉願上覚」や天明七年（一七八七）十一月二十五日条「奉願上覚」などに、学徒扶持の請願がみられ、天明八年（一七八八）四月二十一日条では、寺社奉行の指摘に対し、学徒扶持の必要性を説明している。『記録』にはそれに対する寺社奉行からの拒絶の記載はないが、その後扶持を受けたとの記載もないので拒絶されたとみてよいであろう。

扶持について、倉澤氏は、「願いを幕府は受け付けなかった。足利学校はその使命を果たした文化遺産としての存在の意義を認めるに終わった」としている（倉澤二〇一一）。一方、結城陸郎氏は「学徒扶持は十九世実巌時代に認められている」と記述しているが、その根拠となる史料を開示していない（結城一九八七）。

ともあれ、官許学問所でも学徒扶持は出しておらず、扶持の

支給はなかったと思われる。管見では、直轄学校となる六年前の昌平坂学問所で寛政三年（一七九一）お座敷講釈に百人扶持、林家家塾に三〇人扶持が支給された以外は、みうけられない。ただし、幕末期の天領では、奉行所が堺郷学所専属を士分に取り立てている例がある（稲垣二〇〇三）。これは教師に対して扶持を支給している例になるのだろうか。

四　学習の場を主とした教学施設

（一）学寮

文化七年（一八一〇）七月三十日条には、「上州板鼻在斧三郎学寮拝借素読十一月帰国」とあり、明らかに学習のために学寮が使用されたことがわかる。学寮に寄宿して、庠主や役僧・隠居僧、ときには足利学校役人に素読を学んだことであろう。足利学校においては断続的に、学寮が存在していたようである。

（二）衆寮

江戸時代を通して常に一棟は存在していたようである（結城一九八七）。足利学校では、衆寮は学寮と使い分けができていたと思われる。『記録』には記載されていないが、衆寮は僧籍者の寄宿舎であり、学寮が置かれていない時期は俗人学習者も寄宿舎として使用していたと想定できる。

（三）孔子堂（大成殿）

既に述べたが、孔子堂が学問所と称されたこともある。孔子堂は中心的堂宇であるが多目的に使用されていたのであろうか。あるいは中世からの機能未分化（祭殿と教場）がそのまま引き続いてしまったのか、明らかではない。

（四）文庫

学習書籍の保管・管理の場であり、江戸時代を通して常に存在していた。また、享和二年（一八〇二）に孔子堂の東側から南方へ五間程移転し、二間×二間から二間×四間に規模を拡大した。これにより書籍の収蔵を倍増できるとともに、方丈庫裡書院から離れることとなった。これは、書籍保存・管理上重要なことである。

おわりに――足利学校は郷校か

近世の足利学校は、幕府からは寺社奉行管轄の寺社扱いとなり、庠主が臨済宗の僧侶であることから、本山ではないが、ほかの関東の臨済宗寺院と同様に金地院を触頭としているのが当時の状況であった。また、徳川家康から与えられた百石の御朱印状には「学に勤め怠慢有るべからず」とあり（中村一九五九）、寺院活動に対しての、例えば徳川家菩提のためとか、誰それの供養のためとかではないことがわかる。日頃の「勤学」の成果を、将軍への年筮献上とみればよいのだろうか。してみ

ると、易学をはじめとして学術的知識を以て家康に貢献した九世庠主三要ゆかりの施設へ御朱印百石を与えたということであり、「勤学」のための百石の扶持とは、教学（学を教えること）というより、その学術的知識の大本となる、中世から守られてきた足利学校所蔵漢籍を維持するための扶持と理解したい。

一方で、江戸時代の足利学校関係者は、施設の性格としては、学校（教学機関としての）であることにこだわりを持っている。そのためか、執拗に寺社奉行に学徒扶持を請願している。また、学徒の世話を金地院へは頼ろうとはしない。加えて、談林・談義所などの寺院学校的呼称は一切使用していない。臨済宗の組織に頼らず、学徒に負担をかけずに[4]、貧富の差なく誰にでも学ぶ機会を与える開かれた教学活動を目指していくことが，足利学校の使命であるかのような振舞である。

足利学校は、責任者（庠主）が僧侶の寺院的施設であるが、学問的には仏教教団からは距離を置いており、幕府の公的・官的支援で、武士・庶民にかかわらずに教学活動を行うものであったとすれば、郷学（郷校）である。ただし、江戸時代中後期の『記録』からみる状況は、庠主個人の努力で教学活動をしており、その経営形態としては寺子屋のカテゴリー（中世的寺子屋）であり、その一端は近世前期の紀行文などからも垣間見ることができる。

また、足利学校の学習者は、平野郷町の含翠堂（享保二年〈一七一七〉設立の郷校）のように年少者を中心とするものと一般成人を対象とするものがあり、してみると経営主体が庠主個人という経営形態ではあるものの、郷学のカテゴリーに近い教学機能を有していたと、現時点では想定したい。

註

（1）川瀬一馬一九七四、結城陸郎一九八七、柏瀬順一二〇〇〇、倉澤昭壽二〇一一などの研究がある。

（2）十七世庠主千渓のように生前引退した場合は境内の隠寮等の建物で余生を過ごしたようであるが、二十一世庠主太嶺のように外へ出るケースもある。また、外の寺から隠居僧として入居するケースもある。

（3）足利市指定重要文化財「境内総坪数並諸建立物絵図」（寛政年間製作）には庫裡の南東部に突き出るようにして小者部屋が描かれている。

（4）地方の若者が遠方の談林で、僧侶となるための教育を受けるには、経済的負担が相当なもので、「実家が学費を負担」したり、「国元の師僧や何らかの支援者がそれを負うこともあった」ようである（梶井二〇〇七）。

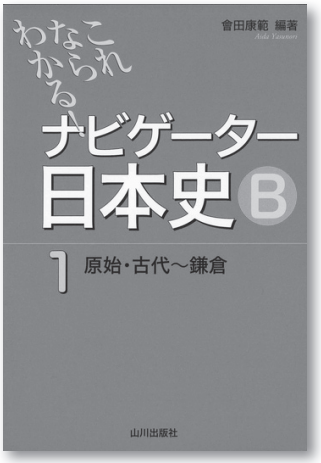
引用文献

稲垣忠彦「郷学校の発展と学習内容」（『帝京大学文学部紀要教育学』二八号、二〇〇三年）
海原徹『学校』（『日本史小百科』一五、近藤出版社、一九七九年）

梶井一暁「近世僧侶の農民子弟の学習活動へのかかわり」（『鳴門教育大学研究紀要』二二巻、二〇〇七年）
柏瀬順一「近世後期における足利学校について」（上越大学大学院修士論文、二〇〇〇年）
川瀬一馬『増補新訂足利学校の研究』（講談社、一九七四年）
倉澤昭壽『足利学校記録』（倉澤昭壽、二〇〇三年）
倉澤昭壽『近世足利学校の歴史』（足利市、二〇一一年）
中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻（日本学術振興会、一九五九年）
結城陸郎『足利学校の教育史的研究』（第一法規出版、一九八七年）

（いちはし・いちろう／史跡足利学校事務所研究員）

これならわかる！
ナビゲーター
日本史B（全４巻）
會田康範・河合敦＝編著



『詳説日本史』に書かれた内容を新しく編集し直して，話し言葉にした参考書。親しみやすい文章で読みやすく，歴史の流れがつかめる。テスト前の総まとめに最適な別冊ポイント・チェック付き。

A5判　200〜300頁　ポイント・チェック56〜88頁
本体1,000円（税別）
（1巻）ISBN：978-4-634-01056-7
（2巻）ISBN：978-4-634-01057-4
（3巻）ISBN：978-4-634-01058-1
（4巻）ISBN：978-4-634-01059-8